

私の車が月を目指していることは、以前に紹介した。明らかに第4コーナーをまわって直線に入っているのだが、ラストスパートが効かない。ひとえに、通勤距離の短さとコロナの影響である。急激なペースダウンである。

37万キロを超えてから、なかなか月に近づかない。車屋さんでは、驚かれるというよりも呆れられる。この前も、「タクシー以外では見たことがありません」とか「エンジンは一度も交換していませんか」などのコメントをいただいた。はっきりしているのは、褒められてはいないという点である。誰も「大事に乗っているんですね」などとは言ってはくれない。

あと1年あまりで、38万キロに到達するはずだった。正確には、384400kmである。今のペースでは、届きそうにもない。これは厳しいと思っていたところで、事態は急変する。あっけなく、月への到達をあきらめ、長年苦楽を共にした愛車を手放すこととなりそうである。

元々、次の車は絞ってあった。なにせ、月に向かっていては、いつ止まるのかわからないのである。時間の問題なのである。少しでもエンジン音が変われば気になる。エンジンのかかりがわるいと焦る。気の休まることはない。

そこまで月への到達にこだわっているわけではない。だが、せっかくのチャンスであればとがんばっていた。到達したからといって、表彰されるわけではない。誰も褒めてもくれない。自己満足の世界である。きっと、知り合いの高校の校長先生が連絡をくれるだけであろう。

車というのは、ちょっと見るだけ、とりあえず見に行くというのが最も危ないパターンである。気づけば、あれよあれよと話が進んでしまうことがある。今回もそうであった。全くその気はなかった。ところが、どう考えても好条件としか思えない展開となってしまった。

思えば、37万キロ以上もよく耐えてくれたものである。元々、人と荷物を運ぶために購入した車である。南会津での単身赴任2年目から、そのストーリーは始まった。FFではあるが、思いの外、雪道には弱かった。そのため、南会津では冬の間中、苦勞をした。雪かきをしないと、車を止めることさえできなかった。

二度目の単身赴任である奥会津では、大雪の中、運転をしていたことがある。前を走る車があった。これは、前の車が止まったらピンチになる。そう思っていた矢先に、案の定、前の車が止まり、毛布やスコップを出して作業を始めた。随分と用意がいいものである。

さて、再び走り出そうとしたところ、スリップして前に進まない。進退窮まった。よりによって、後ろからは大型の除雪車がやってきた。私の車が邪魔なのである。焦る。ロープなどない。結局、除雪隊のお世話になり、何とかその場を脱した。

長男と長女の引っ越しでも活躍してくれた。後ろのシートを倒せば、けっこうな量の荷物が入る。息子の高校時代には、部活動で人を乗せて遠征に出かけた。そして、娘の部活動では、中学校でも高校でも、人を乗せて随分と遠くまで出かけた。宮崎にも行った。いつも、3列シートが、その威力を発揮した。

気づけば月に向かっていたが、よくも無事でいてくれたものである。車屋さんが教えてくれた。車にも当たり外れがあると。私の車は、間違いなく大当たりである。お疲れさまでした。